

Unheard Voice：アドベンチャー教育での女性の活躍

関 智子

Abstract

The purposes of this note are to explore the history of the women in and related to, outdoor and/or adventure learning internationally and in Japan. First, the lecture by Mitten (2018) on those contributing internationally is shared. Marina Ewald's contribution to the field will be shared in detail. With the information, how to search the contribution of women in Japan will be discussed.

Key words: Women outdoor, AEE Webiner, Marina Ewald, Japan

1. 初めに

2020年に本格的となった新型コロナウイルスによる感染症のパンデミックによって、アドベンチャー教育はある意味、窮地に立っている。これらの体験的な学びは、オンラインを利用するか、リアルな体験を延期し、規模や時間を縮小して行わざるを得ない。このウィルス感染症の終息の目処と道程がまだ不確かな期間が続く中、この手法を使う学びをどうすればよいか検討し続けている。その過程で、なぜこのアプローチを取るのか、この良さは何か、その源や歴史はどのようなものだったかを知ること、変えずに維持すべきものを知って、変えていくことができるのではないかと考えるに至った。このノートでは、女性の活躍の歴史について情報共有を行いたい。

2. 本研究ノートの目的

本研究ノートの目的は2つある。1つ目は、欧米諸国から見た、アドベンチャー教育や野外教育に関連した領域での女性の活躍の歴史の一部を紹介することである。これは、2018年に行われたDr. Denise Mittenのオンライン講演(AEE Webiner, 2018)を参考に紹介していく。特に重要と考えられる人物Marina Ewaldについて詳細に記述する。2つ目は、今後日本での同様のことを調べる際にどのように調べるべきかの指針を得ることである。

3. Mitten (2018) オンライン講演

Mitten (2018)は、特にアウトドア産業や教育にとって大きな影響を与えた女性の歴史について長年調査を続けている。その調査の成果の一部として、女性先駆者34名について、AEEのオンライン講演で紹介した。なお、AEEはAssociation for Experiential Educationの略称で、米国の体験教育学会である。25カ国1700人程度の会員が登録する(AEE, 2022)、国際的な学会でもある。この講演の原題は「コルセットを脱いで森へ[筆者訳]」であり、活発で野外や自然を活用して活躍したと解釈できるタイトルである。紹介された人の一覧は下記の表1: コルセットを脱いで森への通りである。なおこの表は講演での発表順で、生年順で並んでいる。なお、Mitten (2018)の書籍リストは文字数の制限のため割愛した。各人については日本語の大まかな情報であれば、Wikipediaの英語版が日本語に訳されたものを見ることができる。

講演の中で、Mitten (2018)は、これらの女性の特徴について、グループで活動するときは集団力学を考慮した行動(コミュニケーションや信頼関係を築く努力を含む)していることや、外国などで挑戦の場合には、自分達のやり方を押し通すのではなく現地スタッフの意見の尊重や良好な関係を築こうとしていたことなどを挙げている。また、冒険中の日記などを見ると、成功したことや克服したことなどよりも、他のメンバーとの関わりや日々の暮らしの機微、または自然に関する描写などが目立つとしている。また、このような調査をする場合、誰

表1 コルセットを脱いで森へ

	名前	生没年	国籍	トピック
1	マリー・パラディス Marie Paradis	1778-1839	フランス人	1808年、女性としてモンブランに初登頂した。当時は裕福な家の女中として登山についていったとされる。
2	ハリエット・タブマン・デイヴィス Harriet Tubman Davis	1822-1913	米国で奴隷に生まれる→自由の身となる	「地下鉄道(奴隷逃亡を助ける地下組織)」のガイド。1600kmの道のり(夜間、道なき道)一人でガイドし、逃亡をガイドすること13回。誰一人捕まることなく、無事に送り届けたことから、「モーゼ」と言われた。
3	スーザン・ブラウネル・アンソニー Susan Brownell Anthony	1820-1906	アメリカ人 (白人)	女性参政権運動家
4	イザベラ・バード・ビショップ Isabella Bird Bishop	1831-1904	英国人	紀行作家、探検家、世界旅行家。『日本奥地紀行』著者) 61歳の時、英国ロイヤル地理学会で講演し功績が認められ特別会員に。
5	サカーガウィア Sacagawea	1788-1812 または 1884	米国の原住民族: レニ・ショショーニ族	アメリカ西部探検ルイス&クラーク隊Corp of Discovery (1804-1806)に雇われ(16歳)、原住民との通訳として参加し交渉役として活躍する。同行中、赤ん坊を産み育て熱病も克服して、隊を大いに助けた。
6	メリー・フィールズ (ステージコーチ メリー) Mary Fields	1832-1914	米国で奴隷として生まれる→自由黒人	60歳の時、スタールート(郵便の大動脈)郵便配送人の権利を取得し、黒人女性初の配達人となる。ステージコーチ(幌馬車)を単独で運転し、銃を携行してオオカミや窃盗団にも負けず、確実に郵便物を届けたので、人々から幌馬車メリーとのニックネームを付けられた。
7	ローゼン Lozen	1840-1889	北米の原住民族チ ビネ・チネカウフ ア・アパッチ族の 戦士・預言者	酋長ヴィクトリオらと共に戦う。1879-81のビクトリオ戦争では、逃げ惑う女性と子供だけの一団が川を渡れず躊躇する中、先頭に立ち馬を泳がせ、勇気づけて、無事に対岸の安全な場所に逃がした。その姿はヴィクトリオよりも叡智に溢れ勇敢であったと部族のメンバーが回想している。
8	アニー・ベック Annie Smith Peck	1850-1935	アメリカ人 (白人)	アメリカの冒険家。登山家。ペルーのブランカ山脈の北のピークのワスカランはクンブレ・アナ・ベックと改名された。女性参政権の活動家。
9	ファニー・バロック・ワークマン Fanny Bullock Workman	1859-1925	アメリカ人 (白人)	アメリカ合衆国マサチューセッツ州出身の地理学者、地図制作者、探検家、旅行記作家、登山家。特にヒマラヤ山脈での実績が名高い。ヨーロッパでは、伝統的な妻・母ではなく男性と対等な女性を目指し「新しい女性」精神を体現した。
10	アレキサンドラ・デビッド・ニール Alexandra David Neel	1868-1969	アメリカ人 (白人)	ベルギーフランスの探検家、スピリチュアリスト、仏教徒、無政府主義者。ダライ・ラマの教えに感銘を受け、チベットのラサに潜入。チベット人の物乞いに変装して、謁見を拝する事に成功(チベットは鎖国していた)。
11	フェイ・フラー Fay Fuller	1869-1958	アメリカ人 (白人)	1890年、Mt. Rainier レニエ山(西海岸西部カスケード山脈にある。4392m)に、女性初登頂。
12	マリア・モンテッソーリ Maria Montessori	1870-1952	イタリア人	イタリア初の女性医師、教育家。幼児期の総合的な教育法: モンテッソーリ法を開発。子ども(幼児)の教育には環境の影響が大きいと説いた。環境としての自然の力についても説いている。
13	ミナ・ベンソン・ハバード Mina Benson Hubbard	1870-1956	カナダ人 (白人)	1903年ラブラドル探検に出かけた新婚の夫を亡くす。夫の死には同行者の過失が疑れた。この同行者の探検の完遂計画を知ると、夫の無念を晴らすため、彼と同時期に冒険を敢行。元探検隊の一人と原住民クリー族のガイドを雇い、1905年、未踏のジョージ川水系の探検に成功した。女性はカメラに乗船できても操作できない中で、ミナの方が成功したのは、他者の意見の尊重し信頼関係が築いたからと言われる。
14	クリスティン・ボネビー Christine Bonnevie	1872-1948	ノルウェー人	ノルウェーの生物学者で女性初の教授。1896年に氷河を旅するが、その時スカートの丈をくるぶしから15 cm上にするという改革を行なった。
15	フリーダ・デファウアー Freda Du Faur	1882-1935	オーストラリア人	アマチュアの登山家。1910年ニュージーランド最高峰クック山(アオラキ)に女性初登頂するなど、NZの高山を登頂し活躍する。
16	マーベル・リード Mabel Reed	1876-1963	アメリカ人 (白人)	Mary ReedとMary E. Arnoldは幼馴染で生涯のパートナー。作家、活動家。The Land of Grasspopper Song(原住民の生活から見える時代について書かれた)共著者。ケロック族(原住民)の白人化教育を受け持つが、逆にケロック族の文化に感銘を受け、部族の自立を助ける。部族のために金融制度や生涯学習、共同住宅制度などを導入する。各地の原住民の自立や権利擁護を行なった。
17	メリー・エリコット・アーノルド Mary Ellicott Arnold	1876-1968	アメリカ人 (白人)	
18	マリナ・エワルド Marina Ewald	1887-1976	ドイツ人	Kurt Hahnの幼馴染で同僚の教育者、地理学者。1925年、Salem Schoolを共同創立・運営を行なった。この学校で始まった遠征プログラムは、Ewaldの発案であり、彼女自身が現場の指導を行なった。その後、遠征教育はHahnによって冒険学校OBSのカリキュラムにも取り入れられた

19	アナウタ・フォード・ブラックモア Anauta Ford Blackmore	1888-1965	米国原住民 イヌイット族	Baffin IslandからIndianapolisにやってきたイヌイット族の女性。作家。イヌイット族の文化や生活を紹介した。イヌイット族への憧れが生まれる
20	ドロシー・ピレイ・リチャード Dorothy Pilley Richards	1894-1986	英国人	登山家、作家。ピナクル（尖塔）クラブ＝女性だけのクライミングクラブを組織。エッセイ Climbing Daysが有名。
21	ミリアム・オブリエン・アンダーヒル Miriam O'brien Underhill	1898-1970	アメリカ人 (白人)	登山家。女性だけのロッククライミングチームでの困難なルートを次々に成功。アルプス山脈のグレボンの困難なルートを女性2人で成功すると、登山家Étienne Bruhlにルートの価値が下がったと非難を受ける
22	Nicolle Maxwell ニコール・マックスウェル	1906-1998	アメリカ人 (白人)	植物収集家。アマゾン奥地に自生するさまざまな薬草を見つける。この地の薬草の可能性に気づき、製薬会社をスポンサーにして様々な薬草を収集。
23	Rachel Carson レイチェル・カーソン	1907-1964	アメリカ人 (白人)	海洋生物学者、作家、環境活動家。「沈黙の春」によって自然破壊、農薬による害について警鐘を鳴らした。OWLというプログラムで子供たちの教育にも関わる。後年引き取って暮らした小さな甥に向けた著作「センス・オブ・ワンダー」では自然の素晴らしさや感動する心の大切さを伝えている。
24	ジョルジー・クラーク・ホワイト Georgie Clark White	1914-1992	アメリカ人 (白人)	マーブルキャニオンとグランドキャニオンをラフティングした最初の女性(1952年)。その後、コロラド川のラフティングガイドの会社Royal Rlver Rat Societyを設立・運営。ラフティングを安全でスリルあふれる体験にするため様々な工夫を施した
25	コンスタンス・ヘルメニックス Constance Helmericks	1918-1987	アメリカ人 (白人)	北極圏の冒険家、作家。1941年23歳の時、大自然での生活に憧れ、夫を説得しアリゾナからアラスカに移住。生活圏外の暮らしをする（～53年）。1964、65年の夏、12歳と14歳の娘と北極海と北部の川をカヌーで冒険した。
26	オードリー・サザーランド Audrey Sutherland	1921-2015	アメリカ人 (白人)	単独冒険家、旅行者、カヤッカー、教師、作家。ソロアドベンチャーボートや水泳の偉業とその偉業を記録した本で最もよく知られる。一人で冒険旅行をする女性のパイオニアである。ハワイやアラスカを旅している。60歳の時行なったアラスカ単独カヤック旅行の本が有名
27	①モニカ・ジャクソン Monica Jackson, ②エリザベス(ベッティ)スターク Elizabeth (Betty) Stark, ③エベリン・マックニコル Evelyn McNicole	①1920-2020 ②1923-2000 ③1927-2021	英国人	1955年、ヒマラヤ山脈Jural Himalの計測のため、地図に未掲載のPhurbal Chyachumbu氷河を超え、チベット・ネパール国境の6705 mの未踏峰の登頂に成功した。同行したシェルパ族の名前を冠しGyalgen Peakとした。これが世界初の女性登山隊による成功とされる
28	グエン・モファット Gwen Moffat	1924-2017	英国人	1953年ウェールズで女性初の認定山岳ガイドとなる。作家。
29	フィリス・フォード Phyllis Ford	1928-1999	アメリカ人 (白人)	オレゴン大学レクリエーション&公園運営学部教授を長く務める。Principles&Practices of Outdoor/Environmental Education, Leadership&Administration of Outdoor Pursuitsの著者
30	コレット・リチャーズ Colette Richards		フランス人	Climbing Blind (1966)の著者。視覚障害を持ちながら、ハンディキャップと考えずクライミングやケイビングを行う
31	田部井淳子 Junko Tabei	1939-2016	日本人	登山家、環境保護家。女性初のエベレスト登頂(1975.5.16)および女性初の7大陸最高峰登頂(1992)を成し遂げる。1969年女子登攀隊(女性のみ)の登山隊を設立し、アンナプルナIII峰登頂(7555 m, 1970年)を果たした。
32	アーリーン・ブラム Arlene Blum	1945-	アメリカ人 (白人)	登山家、生物物理科学者、作家。米国女性隊によるアンナプルナI峰登頂のリーダー(1978年)。現在はバークレー大学科学研究所研究員。
33	難波康子 Yasuko Namba	1949-1996	日本人	登山家。7大陸最高峰登頂を日本人女性2人目(世界では女性として44人目)として成功(1996年)。豊富な登山経験を持つ。1996年エベレストのNZの商業国際公募隊に参加が認められ登頂を果たすが、下山中遭難し凍死。その時のことを書いた本『空へ』で素人として誤解され批判されている。
34	キャシー・フィップス Kathy Phibbs	1958-1991	アメリカ人 (白人)	クライマー。中米や南米の山岳地帯で女性初の登頂を次々と成功させる。1983年には、北西部女性クライマーの会を発足させた。85年には、Woodswomen(女性のためのアドベンチャー会社)の北西部支部を始める。1989年ネパールPumoriの全女性登山隊の一員として登頂。滑落死

が最初なのかという記録の達成による「初」を探すことは意味がなくなってくることと、行動の意図や行動によって何が起こったかなどの結果にも注目する必要があると述べている。

さて、上記の人々に共通するものは何か、いくつかの視点で考えてみる（数字は上記の表の番号を示す）。

①行動の理由や背景：

34人の行動の理由はどこにあったのかで分類してみると：関係性（雇用関係）による、共感による、名誉の挽回、他意のない挑戦などに分けられる：

- ・雇い主（長期間の顧客）またはクライアント（短期間の顧客）のために：1, 5, 6, 16, 17, 24, 28, 34.
- ・教育のために：12, 14, 18, 23, 29, 29, 32.
- ・家族の名誉挽回：13.
- ・同胞（同じ立場の人、同じ部族の人）のために：7
- ・立場は違うが想いを寄せた他者のために：2, 16, 17.
- ・体験をまとめて、著作で一般に情報共有したことがさまざまな啓蒙の機会ともなった：4, 9, 10, 16, 17, 19, 20, 23, 25, 26, 28, 29, 30, 31.

②行動の意図と結果：行動を通して何が起こったか・何を訴えたか・教訓は何かを見ることによって、これらの女性たちの貢献を分類できるか試みると：

- ・新しい可能性を示した：全員
- ・女性差別の撤廃への努力：3, 8, 9.
- ・利他的行動が特に著しい：2, 5, 7, 12, 16, 17, 18, 27 (3名), 29, 32, 34.
- ・その人が生きた当時の人々が女性に持つ典型像を裏切った：全員
- ・女性自身が女性に対して持つ固定概念（例：～すべきでない、できない）を覆す：全員

次に、Mitten (2018) の講演から離れ、特に重要である Marina Ewald について詳述する。

4. Marina Ewald (マリナ・エワルド)

Mitten (2018) が紹介した34人の一人、マリナ・エワルド Marina Ewald (以下、Ewald) については、アドベンチャー教育への貢献が大きいものの、最近まで認知されていなかった。2018年には、アドベンチャー冒険

教育で活躍する世界的な冒険学校 Outward Bound School (以下 OBS とする) が始まった英国の Outward Bound Trust でも、女性インストラクターの躍進を図るプロジェクトが始まる (Outward Bound Trust, 2021) など、多様性の認知についていくつかの動きがあった。また、同じ年かは確認できないが、AEE の学会の最高賞 Kurt Hahn 賞は、Marina Ewald & Kurt Hahn 賞と名称が変更されている。また、近年は OBS でも、彼女の貢献について伝える記事を掲載している (例えば、英国 Outward Bound Trust の国際女性デーの記事 (Outward Bound Trust, 2021))。これらの動きは下記の書籍による情報共有によるところも大きい。

Veevers, Nick & Allison, Pete (2011) は、野外教育のさまざまな実践では、Kurt Hahn (クルト・ハーン。以下、Hahn) に活動や哲学の源を見出す一方で、彼が本当は何をしたのかは明らかでないという問題意識のもと、Hahn の前半生 (1944 年の英国教育法まで) を論文や書籍だけでなく、ドイツで彼が創立した学校や関係先などの現地取材や関係者へのインタビューなども含め詳細に追っている。また、Ewald 自身が、Hahn の教育や政治についての側面について詳しく書かれた書籍でザーレム校の章を執筆しているので、その二つの資料を中心に Ewald と Hahn についてまとめていく。

4-1 Hahn と Ewald

まず、Ewald を語るには Hahn のことを語らざるを得ない。Hahn はオックスフォード大学などで教育を受けた後、第一次世界大戦に敗れ社会的・政治的な混乱下のドイツで、ドイツ帝国宰相マックス・フォン・バーデンの秘書となった。当時の社会ではそれらの混乱の中で、民主主義の高揚と教育によって社会を変えようとする気運が高まっていた。Kerschensteiner による新教育運動、ワンダーホーゲル (元々渡り鳥という意味。転じて山野をめぐり歩いて、心身を鍛えることをめざすスポーツとなった (日本国語大辞典, 2002))、国立寄宿学校の創設、そして学校野外活動センターの発展などが起こっている (Veevers & Allison, 2011, p. 1)。

最初に、Hahn は、マックス・フォン・バーデンの屋敷の一部を学校に転用するなど全面的な支援により、Schule Schloss Salem (Salem School (英語)、直訳はザーレム城校。以下ザーレム校とする) を 1920 年 4 月に設立した。Ewald はザーレム校の共同設立者の一人であり、地理の教員でもあった。1929 年には姉妹校 Spetzgart の創立時に校長になり、その後はザーレム校の校長も勤め

ている (Veevers & Allison, 2011, p. 81)。その後 Hahn は英国に亡命し、1934年に Gordonstoun 校を開校した。そして、1941年には、通常の学校ではないが、アウトドアスキルの獲得とアウトドア活動を使って、人格教育 (キャラクターエデュケーション) を行う冒険学校 OBS を創設している。この冒険学校によってアドベンチャー教育の手法や哲学は大きく飛躍した。Hahn の教育哲学を受け継いだ United World College や Round Square には、現在世界数十校が登録されている。これらの学校も、野外での活動がカリキュラムに含まれ、優秀な生徒には Kurt Hahn 賞が授与される (Veevers & Allison, 2011, p. xxi)。これらの学校については、学校の HP だけでなく、さまざまな書籍にも書かれているので参照されたい。

Ewald は、Hahn の Lietz Country Boarding Schools での学友で自身も教育者であった。親しい友人または単なる共同設立者ではなく、教育上の重要な決断をともに行うパートナーだったと Hahn 自身が証言し、また当時の複数の生徒もコメントしている (Veevers & Allison, 2011, p. 81)。

4-2 ザーレム校

この学校は Hahn の考え方に共鳴した人々が集まり、開設時は 20 人の生徒でスタートした共学校が数年のうちに複数の姉妹校が開校されるほどになっている (Ewald (1970))。ザーレム校では一人ひとりの主体性を伸ばす教育が行われ、芸術活動や演劇の重視、体力づくり、遠征やその他のアウトドア活動、ホッケーを中心としたチームスポーツの試合、色で分かれたグループへの誇りを持つこと、趣味のグループでは生徒が主導権を持って民主的な運営などが行われていた。生徒は日々の生活に関することに各自が責任を持って行うなど、さまざまな面で主体的に行動することが求められた。後に Hahn はザーレム校とその姉妹校での教育を通して、若者の教育のエッセンスを次の 7 か条にまとめた (ザーレムの 7 か条)：(1) 生徒に自己発見の機会を与えること、(2) 生徒に勝利と敗北の両方を経験させること、(3) 公共のために無私となる機会を与えること、(4) 沈黙の時間を与えること、(5) 想像力を育み、予期して計画する訓練をすること、(6) スポーツや競争に重きを置くこと、しかしそれは一部でしかない (競争に支配されないようにすること)、(7) 富と権力を受け継ぐ子らを、特権から解放すること (Ewald, 1970)。創設から 100 年以上経った現在のザーレム校は、世界 40 カ国 600 人の生徒が学ぶ寄宿学校となっており (Schule Schloss Salem, 2022)、

演劇やアート、奉仕活動、アウトドア活動は今も組み込まれている。

4-3 ザーレム校での Ewald の貢献：遠征教育の始まり

彼女の数ある貢献の中でも、アドベンチャー冒険教育に関係が深いのは、遠征 (Expedition) の発案である。今日では、遠征プログラムは Outward Bound School はじめ、世界中の類似のプログラムに採用され、自己発見のための手段として重要視されている。この発案者は Hahn ではなく Ewald である (Veevers & Allison, 2011, p. 10)。1925 年に Ewald によって、フィンランドでの 4 週間の遠征教育プログラムは発案された。20 人の男子生徒と男性教員 1 名、そして彼女が入って 22 人のグループであった。Ewald はグループでの唯一の女性であると同時に、リーダーであった (Veevers & Allison, 2011)。彼女は、これは自分の夢の実現でもあったことと、教員が自らの興味を教育活動に活かすことは、極めてザーレム校式であると説明している (Ewald, 1970)。この遠征はフィンランド南部の湖沼地帯を旅する、手漕ぎボートを使ったプログラムであった。ボートの購入と売却それに伴う交渉、陸路での移動、魚釣りや狩猟によって食料を調達しながら無人島を野宿して移動するほとんど無人地帯での旅だった (Ewald, 1970)。このプログラムについて Hahn は、「長く困難な遠征」だったと記述している (Veevers & Allison, 2011)。その後、Ewald によって 1937 年にはアイスランドへの遠征も実施されている。

この遠征プログラムの特徴は、単なる冒険プログラムではなく、始まりから終わりまで全てが総合的な学びの場であり、困難の連続だった。Ewald (1970) は、この遠征は、「発見の航海 Voyage of Discovery」であったと記述している。当初 Hahn はこのプログラムにあまり乗り気でなかったが、このプログラムの成功により、遠征は、「周到な計画と忍耐を伴う」ものとして教育の要素として重視するようになった (Ewald, 1970)。

初期のザーレム校では、さまざまな活動が推奨されていた。それらの活動に関する項目は、初期の成績表では学業よりも項目数が多く重視されている (Ewald, 1970)。これはこの学校では人格形成が重視されたからであり、自習表も生徒が管理するなど偽りのなさや主体性が求められた。Ewald は、Hahn が教育の世界ではなく政治の世界からスタートしたことで、教育の大きな役割を考えることにもなっており、民主的な教育によって国に貢献できると考えていたと書いている (Ewald, 1970, p. 22)。

Hahnはザーレム校校長であった1930年代は社会主義者や全体主義者両方から狙われ、誘拐未遂事件に巻き込まれるなどした。その後はナチスに追われる身になっている。1933年には逮捕され数日後に釈放されたが、直後に英国に亡命した（Ewaldはこの頃のことを詳しく記述している（Ewald, 1970））。Ewaldは、Hahnが英国に亡命後も、第二次世界大戦以前まではドイツから生徒を連れて英国に赴き交換留学や交流をするなど、故郷とHahnをつなげる努力を怠らなかった（Veevers & Allison, 2011, p. 81）。

5. 日本での野外教育：女性の活躍

日本の野外教育の起源をまとめた井村仁（2006）によると、さまざまな起源の捉え方の中でもキャンプと学校登山が野外活動の初めに大きく関わっている。学校登山で女性が関わっているものは、長野市立長野高等女学校の生徒が、1902（明治35）年以降、長野県内の戸隠山、飯綱山、妙義山、富士山などに登山している例と、1905（明治38）年の、東京府第一高等女学校の富士山集団登山である。さらに井村（2006）はこの第一高等女学校は男女を通じて、学校登山の最初であると紹介している当時の新聞記事を引用している（井村、2006）。

Mitten（2018）に習って、日本での女性の貢献について：（1）野外や自然に関係している、（2）女性の地位向上に貢献した、（3）記録創造（冒険など）、無私の行動、教育への貢献などのカテゴリーを設けて、（1）と（2）または（1）と（3）の組み合わせで調べることができる。この場合の（1）に該当するのは、例えば江戸時代末期の1832年、富士講（御師をリーダーとする宗教登山）で尾張徳川家の江戸屋敷の女中・高山たつと、女性初の飛行士西崎きくであろう。高山は女人禁制下男装し、女性初の富士山登山に成功し（竹谷初負、2011）、西崎きくは水上飛行機や陸上飛行機の免許を取得している（1934年。女性初の水上飛行機士操縦免許取得（上里町、2022））これら二人の活躍は小学生向けの書籍にも掲載されているほどである（伊藤節・樋口恵子（監修）、2016）。無論、これらの例はほんの一部にすぎない。

近代（明治時代以降）に女性に新しい門戸を開拓した人として、95人が紹介されている（東京女性財団、1994）。ここでは、医療、教育、政治など女性には解放されていなかった分野で活躍したか、弱い立場にある人たちの救済を行った人などが掲載されている。残念ながら、野外や自然に関係している人たちについては掲載さ

れていない。

一方、Takano, T.（高野孝子、2018）は、日本での野外教育の発展に関して、目覚ましい貢献をした女性として、元青少年教育振興機構の理事長であり、ガールスカウト日本の理事長であった松下俱子と、元津田塾大学教授で日本キャンプ協会やYWCAの活動に長く取り組んだ、田中祥子の名をあげている。高野もアマゾン河の川下りの冒険や、国際女性探検隊として北極点まで犬ぞりで探検するなど冒険家の側面を持つ。教育者としても日本での環境教育や地域教育、または野外での学びの女性先駆者の一人である（ミクロネシアヤップ島での体験プログラムの展開や早稲田大学で野外教育、地域文化の体験）。

現在活躍している女性については、現代（おおよそ1980年代以降）は、論文や記録、記事だけでなく、本人を含め関係者もいることから情報を得ることは比較的容易である。明治期から大正期、昭和初期は色々な分野で女性の活躍が目立つようであれば、記録に残っている可能性が高い。女性が「初」に関わっていれば、記録として残っている場合も多い。一方で、日本の野外教育の起源から現在までの間や野外や自然に関する業界の中での女性の活躍についてはキーワードの検索などの表面的な調査ではまだ十分な成果は得られていない。

6. 考察

この研究ノートは、女性の活躍の歴史を紐解いていくことの端緒とするために記したものである。欧米諸国から見た女性先駆者の歴史を概観することはMitten（2018）の調査によって、34人の活躍を知ることができた。また、Ewaldの貢献については、本人が書いた記事も含めて遠征プログラムの開始というHahnの教育を実践する方法への貢献について紐解くことができた。日本での女性先駆者の調査の指針については一定のテーマは得られたものの、完全ではない。5. で取り上げた3つのテーマは言い換えの必要なコンセプトであり、単なる単語やイベントの検索からだけでは調査が難しい。

また、Mitten（2018）が情報共有した女性たちは、ある意味、野外での活動を通して差別や固定概念、社会通念と戦っていた戦士である。この戦いというコンセプトは自らの意志によって自由を勝ち取るという米国の歴史の文脈だからこそ多く見つけられるテーマではないだろうか。日本でも女性参政権の運動など戦いを挑んだ女性たちもいるが、調査を開始したばかりの手応えとしては、

戦いという構図だと見つけにくいだろうという推測している。戦いという対立構造を作るのではうまく見つけられない可能性が考えられる。その意味では戦士を見つけて出すのは容易ではないだろう。

今後の展望としては、米国はじめ欧米の状況を引き続き知ることは日本での実践に役立つだろう。また、個人を調査するだけでなく、アウトドアでの学びを展開している団体を詳しく調べることを必要だろう。例えば、ガールスカウトは長年女子のための遠征プログラムに取り組んでおり、YWCAも長くキャンプ活動は女性のためのプログラムを展開している。また、Takano (2018) によって名前が上がっている現代の先駆者についても調べる必要があるだろう。そうすることでアドベンチャー教育で女性を含め多様性を含んだ形で広がるヒントを探っていきたい。

謝辞：オンライン講演の内容について記述することを承諾してくださった、Dr. Denise Mittenに深謝いたします。

注：

- ・Mitten (2018) の講演: Webinerとして公開されているので、視聴されることをお勧めする。
- ・Mitten (2018) の文献リストは割愛した。

引用文献リスト

- AEE (2022). Membership, Association for Experiential Education, <https://www.aee.org/membership-information> (Retrieved 2022/1/3).
- Ewald, M. (1970) Salem School 1919-1933: Foundation and expansion, In Rohrs, H & Tunstall-Behrens (Eds.) H., Kurt Hahn: A life span in education and politics, pp. 22-38, Routledge & Kegan Paul, London: UK.
- 井村仁 (2006). わが国における野外教育の源流を探る, 野外教育研究, 10(1), 85-97.
- 伊藤節・樋口恵子 (監修) (2016). なりたい自分になろう：人生を切りひらいた女性たち③文学・美術・芸能・文化編, 教育画劇.
- Mitten, D. (2018) AEE Webiner No. 33, Out of Our Corsets and

into the Woods, on April 24, 2018, <https://www.youtube.com/playlist?list=PLd-UfB5wOgOOIjqczKPkIT0KkRGEhkUwI> (Retrieved 2022/1/3).

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編 (2002), 日本国語大辞典第二版, 小学館, <https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=20020485b1f124bkQwB0> (2022/1/5 閲覧)

Outward Bound Trust, The (2021). Blog on March 8th, 2021, Unsung Heroines: Celebrating the Woman behind Outward Bound, The Outward Bound Trust webpage, <https://www.outwardbound.org.uk/blog/unsung-heroines-celebrating-the-woman-behind-outward-bound-1> (Retrieved 2022/1/5).

埼玉県上里町, 上里町ホームページ: 郷土の偉人: 西崎きく, <http://www.town.kamisato.saitama.jp/ijin/> (2022/1/5 閲覧)

Schule Schloss Salem (2022), <https://www.schule-schloss-salem.de/en/> (Retrieved 2022/1/5)

Takano, T. (2018). Seeking a Way beyond Gender: A case from a personal story, In Gray, T. & Mitten, D. (Eds.), The Palgrave International Handbook of Women and Outdoor Learning, 851-862, Palgrave Studies in Gender and Education by Palgrave Macmillan, Cham: Switzerland.

竹谷鞠負 (2011). 富士山と女人禁制, 岩田書院

東京女性財団 (編) (鈴木裕子監修) (1994). 先駆者たちの肖像：明日を拓いた女性たち, 東京女性財団.

Veever, N. & Allison, P. (2011). Introduction, In Kurt Hahn: Inspirational, visionary, Outdoor and Experiential Educator, (pp. xvii-xxii). Sense Publisher: Rotterdam, the Netherlands.

Veever, N. & Allison, P. (2011). Chapter 1: Changes in Germany, In Rohr, H. (Ed), Kurt Hahn: Inspirational, visionary, Outdoor and Experiential Educator, (pp. 1-4). Sense Publisher: Rotterdam, the Netherlands.

Veever, N., & Allison, P. (2011). Chapter 2: SALEM, Kurt Hahn: Inspirational visionary, outdoor and experiential educator, pp. 5-14, Sense Publishers: Rotterdam, the Netherlands.

Veever, N., & Allison, P. (2011). Appendix A: People influential in the development of outdoor activities (5) Marina Ewald, In Rohrs, H & Tunstall-Behrens (Eds.) H., Kurt Hahn: A life span in education and politics, pp.79-92, Sense Publishers: Rotterdam, the Netherlands.

(せき ともこ)